

迷子の遊園地 20周年記念公演

【おかしな朝】 作・藤田ヒロシ

● キャスト

メメ……………

不自由なく育てられている者

父……………

優しく悪意を持たない者

母……………

優しく悪意を持たない者

クロ……………

メメに贈られた人形。内の世界を伝える者

オールド（男）：

メメに贈られた本。知識を与える者

執事……………

メメを見つめ続ける者

舞台の上にはテーブルと三つの椅子

○イントロダクション

中央の椅子にメメが座っている。それを取り囲むように顔の隠した灰人（執事を除くキャスト）。口々に話し出す。

1（母）

初めて恋に会った時、見ている事が全てだった。それも真っ直ぐに視線を向けられずいつも遠くからひっそり。寂しくも哀しくもなかった。私の心は何物にも傷付けられずキラキラと美しく輝き続けた。それが私。それが私。それが私……。

2（メメ）

子供の頃、木登りが得意だった。毎日のように神社の楠に登って沈む夕日を眺めていた。1人。だけれど独りぼっちではなかった。私は楠に抱かれていたその瞬間、「生きている」と感じる事が出来ていたのだった。それが私。それが私。それが私……。

3（オールド）

この世が嘘で出来ていると知った日、嘆く事はなかった。純真な物など携えてはいなかった。だからと言ってそれが救いになる程、隠さなければならぬ失望も狂気も持ち合わせてはいなかった。私は悲観も楽観もなく「そうなんだ」と受け入れたのだった。それが私。それが私。それが私……。

4（父）

正義が人を救う唯一の手段だと信じていた頃、数多くの決め事の中で過ごしていた。それは例えるなら「スタンプラリー」を繰り返す日々。あらかじめ用意された目的。私はそれを追うだけで自分は正義を実行し救われるのだと思いついていた。それが私。それが私。それが私……。

メメ

私は地図もコンパスも必要だと感じてはいなかった。差し出された手さえ離さなければ迷子にならないと安心していった。強く握り返す。それだけで行くべき場所に辿り着ける。そう信じ、微塵も疑いなど抱かなかった。それが私。

やがて一つになり、

灰人たち

それが私。それが私。それが私。それが私……。

そこへ執事が現れる。

執事

卵の良し悪しは親鶏の良し悪し。清潔に保たれた鶏舎。天然由来の餌。ストレスなく育てられた親鶏が産み落とした卵。

本物とは手間と暇かけ完成させた物。10年の歳月をかけて改良さ

れたパンに最適の小麦を契約栽培。天然酵母で低温長時間発酵。新鮮、それは単に「収穫から間もない」という意味ではない。収穫から加工、運搬、徹底した品質管理でオレンジ本来の美味しさと栄養素を余すことなくお手元に。

二人の灰人が残り（父、母）顔を隠している物をテーブルに置き椅子に座る。

執事

料理の良し悪しは素材の良し悪し。

一礼して去ってゆく。

照明が変わる。

○メメの家

椅子に座っているメメ。そして、父と母。

メメ おはよう、ママ。

母 おはよう、メメちゃん。

メメ おはよう、パパ。

父 おはよう、メメちゃん。

母 よく眠れた？

メメ うん。

母 それはよかったわ。

父 静かで穏やかで、昨日とも変わらない。いい朝だ。

母 そうね。

と、メメを見る父母。

メメ はい、パパ、ママ。

父 さあ食事にしよう。

手を組み祈る父母。そしてメメ。

父（同時） 頂きます。

母（同時） 頂きます。

メメ（同時） 頂きます。

と、食事を始める父母。そしてメメ。

母 このオムレツ、絶妙な火加減ね。バターを焦がすことなく手早く仕上げ雑見を一切感じないわ。なめらかで舌の上でとろける仕上がりが。

父 何と言っても素材がいい物だ。料理の基本は素材だからね。

メメ 今日の朝食も美味しいわ。ありがとう、パパ、ママ。

互いを見合いほほ笑む三人。

食事を続ける。

母 このパン、香りが芳醇だわ。噛めば噛むほどに優しい小麦の甘みが広がる。しっとり、もっちり、食感も素晴らしい。

父 何と言っても素材がいい物だ。料理の基本は素材だからね。

メメ 今日の朝食も美味しいわ。ありがとう、パパ、ママ。

互いを見合いほほ笑む三人。

食事を続ける。

母 オレンジジュースも絶品ね。丁寧な仕事を感じるわ。舌に全く不快感を与えない。純粹でこの上ない酸味と甘みの調和ね。

父 何と言っても素材がいい物だ。料理の基本は素材だからね。

メメ 今日の朝食も美味しいわ。ありがとう、パパ、ママ。

互いを見合いほほ笑む三人。

父 ごちそうさま。

メメ 今日は、パパ？

父 少し遅くなるかな。

母 ごちそうさま。

メメ 今日は、ママ？

母 お仕事よ。なるべく早く帰るわね。

メメ ごちそうさま。美味しい食事を今日もありがとう、パパ、ママ。

父母

メメちゃんはいいい子ね。

と、メメの頭を撫で戻ろうとするが、

父

あ、そうだった！

母

パパ、どうしたー（言葉が途切れて）あ！そうだったわ！

と、見合う父母。

メメ

どうしたの？パパ、ママ。

父

メメちゃんに贈り物があるんだよ。

メメ

私に？

母

そうよ。いま持って来るわね。

と、戻って行く父母。

じつと一人たたずむメメ。

戻って来る父母。その手には大きなリボンのついた包み。

見合う父母。

母

パパからどうぞ。

父

ママからどうぞ。

母

パパから。

父

ママから。

父母

メメちゃんはどっちからがいい？

（父母を交互に見る）

母

パパから？

父

ママから？

メメ

一緒に。

父母

一緒に！？

父

そうか、一緒にか。

母

そうね、一緒にね。

父

それじゃ。

母 行くよ。

父母 せーの、はい。

と、同時に包みを開ける。

父の手には古い本。母の手には古い人形。

父 メメちゃん。本、好きだろ？

母 よかったわね。メメちゃん。お人形、好きでしょ？

父 よかったね。メメちゃん。

と、本と人形を手に取る。

父 それはね、パパが子供の頃に欲しかった本なんだよ。

メメ 「子どもの頃」？

父 いまのメメちゃんくらいのこと……パパだって子供だったんだよ。

母 可愛かったでしょうね。

父 メメちゃんには叶わないけどね。

母 それはそうよ！

父 本屋さんの棚の上の方にそれはあってね。いつも見上げていた。すぐ欲しかったけど、パパのパパは買ってくれなくて。だから自分で買おう！とお小遣いを貯めて、二年経ったある日、当たり前のように貯金箱に硬貨を落として思ったんだ。「僕は一体何の為にオカネをためているんだろう？」って。

メメ え？

父 自分が何を求めていたか、忘れてしまっていたんだ。でもね、これの本屋さんで見つけた時に思い出したんだよ。そして思ったんだ。パパには叶わなかったけど、メメちゃんには持っていて欲しいって。大切にしてくれるかな？

メメ うん。ありがとう、パパ。

と、頭を撫でる。

メメ (本を持ち) アナタはどんな物語を聞かせてくれるの？私にどんな風景を見せてくれるの？

と、本を開くメメ。

父
メメはいい子だね。

照明が変わる。(父母ストップモーション)

メメ
鏡よ、鏡、鏡さん この世で一番美しいモノは？

鏡よ、鏡、鏡さん

本を読み、遠くを見つめるメメ。

メメ
右は左で、左は右で。鏡の中はいつもあべこべよ。鏡は真実なんて知らない。子供だましょ。

声
鏡は嫌いですか？

メメ
(驚きで声が出ない)

声
鏡は嫌い？

メメ
(立ち上がり、辺りを見渡す)

声
良い反応です。

メメ
(本を閉じようとする)

声
そっと。

メメ
え？

声
そっと閉じて下さい。古いんで。

と、古ぼけた装いの男が現れる。

メメ
(驚きで、本を落とす)

男
あ！

と、バランスを崩して膝をつき、

男
そっと扱って下さい。古いんで(本を指し、脇を押さえ立ち上がる)

メメ
え？え？え？

と、男と本を交互に見る。

男
良い反応ですね……って言いたいところですが……驚いてるんです

よね？

(頷く)

男 それならば、もう少しこう……熱量があってもいいかと思えますよ。
「え、ええええええ！！！」とか「わ、わあああああ！！！」とか。

……。

男 まあ、いいです。(本を拾って)大切に扱って下さい。

と、メメに差し出す。

メメ (本と男を指さして)あなた？

男 そんなところです。

メメ (ゆっくり本を受け取り、振る)

男 (反応しない)

メメ (本を激しく振る)

男 (反応しない)

メメ (床に叩きつけようと振りかぶる)

男 (慌てて)ダメ！それはダメです。言ったでしょ？古いんです。大切に扱って下さい。

メメ (手を下し、くすぐる様に本に触れる)

男 (身をくねりながら)ダメ、そ、それもダメ……です。

メメ (より激しく触れる)

男 (より激しく身をくねりながら)だ、だ、だー(言葉が途切れ動きも止まる)

メメ え？(動きが止まる)

男 (自分と本を交互に指して)繋がってはいませんよ。先ほどのは理解してもらおう為のお芝居です。

メメ よかった。

男 ……と、言うと？

メメ 繋がっていたら、気持ち悪くて読めないわ。

男 ……ですよね。

メメ (椅子に戻って、本を開き) 嫌いよ。

男 え？

メメ 「鏡は嫌いですか？」ってさっき聞いたでしょ？

男 そうでしたね。では、どうして嫌いなのですか？

メメ 私を映さないから。

男 ……と言うと？

メメ (本を閉じようとする)

男 そつと！

メメ (手を止める)

男 お願いします。

メメ (そつと本を閉じ) とにかく、嫌いな物は嫌いなの。

男 そうですよね、嫌いな物は嫌い。特別何か理由があるとは限りませ
んよね。

メメ ……。

男 ね？

メメ 今度は私が質問する番。

男 ……いいですよ。

メメ 私、寝ているの？

男 はい？

メメ これは夢でしょ？

男 あ。

メメ (本を掲げて) 詰まらなくて寝ちゃったのかしら？

男 ……。

メメ 本から…これが現実なんておかしい。

男 おかしい……か。

メメ おかしいわ。

男 メメはおかしなこと言うんだね。

メメ 私の名前！

男 聞こえてましたから。本に話しかけたのは誰だったかな？

メメ ……。

男 それではメメ、私の名前を付けて下さい。

メメ ……名前ないの？

男 いっぱいありましたよ。ハカセ、センセ、ダン、トト、ヨミ…

メメ それは名前というよりあだ名ね。

男 ブックマンっていうのもありました。

メメ そのままね。

男 呼び名としては少し長いので、いつの間にかブックに。まさにそのまま。

メメ (小さく笑う)

男 いまはまさにブックマン・オールド・スタイルになりました。

メメ ?

男 書体の名前です。

と、メメの持っている本を開く。

メメ 文字に名前があるの？

男 書体です。文字の形。何にでも名前はありますよ。ですから、私も付けて下さい。

メメ なぜ私が？

男 メメが新しい持ち主ですから。お願いします。

照明が変わる。(消える男)

本と人形を持っているメメ。それを見ている父母。

母 それはね、ママが子供の頃に欲しかったお人形なのよ。

メメ 「子どもの頃」？

母 いまのメメちゃんくらい……ママだって子供だったのよ。

父 可愛かっただろうね。

母 メメちゃんには敵わないけどね。

父 同じくらいじゃないかな。

母 (少し照れて) 敵わないわよ。メメちゃんの方がずっと可愛いわよ。

メメ (父と母の顔を見る)

母 玩具屋さんのショーウィンドウにそれは飾ってあってね。いつも見とれてたの。すぐ欲しかったけど、ママのママは買ってくれなくて。だから自分で買おう！とお小遣いを貯めて、二年経ったある日、当たり前のように貯金箱に硬貨を落として思ったの。「私は一体何の為にオカネをためているんだろう？」って。

メメ え？

母 自分が何を求めていたか、忘れてしまっていたの。でもね、これを玩具屋さんで見つけた時に思い出したの。そして思ったの。ママには叶わなかったけど、メメちゃんには持っていて欲しいって。大切にしてくれるかな？

メメ うん。ありがとう、ママ。

母 メメちゃんはいいい子ね。

と、頭を撫でる。

メメ (人形を持ち) アナタはどんなお話をしてくれるの？私とどんな風景を見てくれるの？

父 気に入ってくれたみたいだね。よかったね、ママ。

母 よかったわ、パパ。

戻って行く父母。

人形に話しかけるメメ。

メメ はじめまして。私はメメ。

間

メメ

「私はクロ」

クロ？

「そう。私はクロ。」

クロちゃん。

「ちゃん付けは止めて！子供っぽくって大嫌い。」

ごめんなさい。

静寂

声

イイノヨ。

メメ

！

声

アヤマラナクテ。

メメ

（言葉にならない声が漏れる）

ぎこちない動きで現れるクロ。

クロ

オドロカセタ？ユルしてね。さいしよのひと言は何をどう言っても驚かせてしまうの。何度やってもね。わかるでしょ？

メメ

（言葉にならない声が漏れる）

クロ

少し待ってね。動くの久しぶりだからさ。

クロ

と、ストレッチのような動きをする。やがてスムーズに動き始め、

クロ

改めまして。私はクロ。よろしくね。

メメ

ク、クロ……？

クロ

いま、付けてくれたじゃない。見たままだけれど、一番好きな色よ。何物にも染まらない色。私はクロ。素敵な名前をありがとう。

メメ

ほんとうに？本当にそう思う？

クロ

私、嘘と冗談は言わないの。

と、部屋を見て回る。

メメ

アナタは――

クロ

（鋭くメメを見て「クロ」と口を動かす）アナタが付けたのよ。

メメ クロちゃ……クロは人形……よね？

クロ そうよ。メメのママに買われた古い――

歩いている途中で突然転ぶ。

メメ だ、大丈夫！？

クロ 久しぶりだから。（立ち上がり）大丈夫。

と、身体を確認するように歩き回り、やがてスキップをしたり複雑な動きを始める。

メメ どうして話せるの？

クロ 人形が話せたらおかしい？

メメ おかしい。

クロ おかしい……か。メメはおかしな――

と、突然転ぶ。

メメ あ！

クロ （近寄ろうとするメメを手で制し）メメはおかしなこと言うのね。

メメ え？

クロ 人形に話しかけたのは誰？

メメ ……。

クロ 「話したい」そう思っていたはずよ。

メメ うん！

クロ 願っていた事が叶った。なのに「おかしい」？

メメ ……。

クロ それ、おかしい。

メメ ……クロは魔法使い？

クロ 人形。

メメ ……。

クロ 素敵な部屋ね。いつも此処で過ごしているの？

メメ (頷く)

クロ 分かりづらいね。まるで書いてある事をただ口にしていただけの下
手クソなお芝居ね。「えっ!」「はあっ!」って心が動いた音よ。
正確に文字になるわけではないのよ。

メメ ……

クロ まあ、いいわ。お外行こう。

メメ え?

クロ (ため息)

メメ ごめんなさい。

クロ 謝ることもないけどね。さ、行こう。

メメ 危ないんでしょう?

クロ 危ないよ。油断すればすぐに落ちて、落ちれば這い上がれない。そ
んな落とし穴がいっぱい。

メメ 嫌よ。

クロ わかる。

メメ 怒られるよ!

クロ わかる。

メメ ダメだよ。

クロ わかる。

メメ どうしてよ。クロは怖くないの?

クロ 怖いわよ。だから楽しいんじゃない。

メメ えっ?

クロ (小さく笑って) 素敵なお部屋ね。いつも此処では息が詰まるわ。

照明が変わる。

執事が現れ、人形を動かすかのようにメメの手足を動かし椅子に座らせ

る。そして、舞台の隅に留まる。

テーブルの上にはハンバーガーとメロンソーダ。

クロ
どうぞ。

メメ
（じっと見つめ）これは？

クロ
よくわからないミンチ肉を固めて焼いて、それを添加物万歳！大量生産のパンに挟んだ素敵な食べ物と果汁なんて1%も入っていないのになぜがメロンの味がする素敵な飲み物。

メメ
…食べ物なの？

クロ
美味しいわよ。

メメ
（テーブルの上を見渡す）

クロ
手掴みで、どうぞ。

メメ
手！？

と、自分の手を眺める。

クロ
どうぞ、召し上がれ。

恐る恐る包みを開きハンバーガーを一口食べるメメ。ゆっくりかんだ後、

メメ
何これ？

クロ
美味しいでしょ？

包みを皿に置くメメ。今度はコップに手を伸ばす。

メメ
何これ？

クロ
美味しいでしょ？

コップを置くメメ。

クロ
初めてだから食べるのを躊躇した。でも食べたなら美味しい。止まらない。さあ、もっと遠くへ――

メメ
嫌！帰ろ！お家へ！

照明が変わる。

執事が父母を連れ現れる。

照明が変わる。

椅子に座っているメメ。そして、父と母。

メメ おはよう、ママ。

母 おはよう、メメちゃん。

メメ おはよう、パパ。

父 おはよう、メメちゃん。ママ。

母 よく眠れた？

メメ うん。

母 それはよかったわ。

父 静かで穏やかで、昨日とも変わらない。いい朝だ。

母 そうね。

と、メメを見る父母。

メメ はい、パパ、ママ。

父 さあ食事にしよう。

手を組み祈る父母。そしてメメ。

父 (同時) 頂きます。

母 (同時) 頂きます。

メメ (同時) 頂きます。

と、食事を始める父母。そしてメメ。

母 このオムレツ、絶妙な火加減ね。バターを焦がすことなく手早く仕上げ……(フェードアウト)

食事を続ける。

母 このパン、香りが芳醇だわ。噛めば噛むほどに優しい小麦の甘みが

… (フェードアウト)
食事を続ける。

母 オレンジジュースも絶品ね。丁寧な仕事を感じ… (フェードアウト)

食事を終える。

父 ごちそうさま。

母 ごちそうさま。

メメ ごちそうさま。美味しい食事を今日もありがとう、パパ、ママ。

父母 メメちゃんはいいい子ね。

と、頭を撫で戻ってゆく。

静寂

声 美味しい食事。本当にそうだった？料理の良し悪しは素材でも、食事の良し悪しは料理とは限らない。

オールド (男) が現れる。

メメ 今日も変わらないわ。

オールド それは答えになってないのでは？

メメ ……。

オールド ところで私の名前ですが、本当に―

メメ 「オールド」よ。

オールド 意味分かって―

メメ 自分で言ったじゃない。「いまはまさにブックマン・オールド・スタイル」って。嫌なら「スタイル」にする？

オールド それなら下を除いて「スター」というのは？

メメ 上を除いて「タイル」は？

オールド 粘土を焼いて作った建築資材と同じというのはちよつと…。

メメ それなら頭文字とって… B・O・S…。

オールド 「ボス」！いいですねえ、Sが一つ足りませんが、ボス！いいです。

メメ やっぱり「オールド」にするわ。

オールド どうしてでー

メメ 私が付けていいんでしょう？

静寂

オールド 失礼しました。オールドでいいです……。

と、肩を落とし戻って行く。

入れ換わる様にクロが現れる。

クロ おはよう、メメ。

メメ おはよう、クロ。

クロ (オールドの去った方を見て) なにかあったの？

メメ 私の付けた名前が気に入らないみたい。

クロ なんて付けたの？

メメ 「オールド」

クロ (笑って) まんまね。

メメ 合ってるでしょ？

クロ 合っているから似合ってる、嬉しいって事じゃないのよ、メメ。

メメ でもクロはー

クロ 私は「私」、彼は「彼」。

メメ 考え直した方がいい？

クロ (しばらく考えて) そのままでいいんじゃない。そのうち慣れて、好きになるわ。それに、名前そのものより、メメが付けて、メメが呼んでくれる。その事の方が大切な事。だからこのまま「オールド」で。(小さく嘖き出す)

メメ ねえ、クロ。

クロ なに？

メメ 「本当に美味しい食事だった？」ってオールドが聞いたの。「料理の良し悪しは素材でも、食事の良し悪しは料理とは限らない」って。

クロ　なんて答えたの？

メメ　「今日も変わらないわ」って、そうしたら「それは答えになってない」って。

クロ　メメはどう思うの？ 答えになってる？

メメ　（頷き）変わらないのよ。毎日同じ。大切なことよ。

クロ　それならどうしてオールドの言った事が気になるの？

メメ　気になってるってわけじゃー

クロ　それならどうして私に話すの？

メメ　意味なんてないわ。ただ話したかっただけ。それでもいいでしょ？

クロ　今朝は昨日とは少し違う。そんなこと感じている？

メメ　そんなことはないわ。同じ、素敵な朝よ。

クロ　メメ、私は人形。

メメ　知っているわよ。

クロ　人形は誰かの言葉を借りて話し、誰かの想いを借りて動くの。

メメ　ふーん。だから？

クロ　だからー（言葉を切って）メメの話聞かせてよ！（メメの椅子に座って）いつも此処で、与えられたモノを信じて、飲み込んで。メメは楽しい？

メメ　「楽しい」？

クロ　どうなの？

メメ　どうしてそんなこと聞くの？

クロ　メメを知りたいのよ。

メメ　私を？

クロ　お友達だもの。

メメ　お友達！ 本当に？

クロ　嘘と冗談は言わないわ。メメはオムレツが好きなの？ オレンジジュースは？ パパは好き？ ママは好き？ どの本が一番好き？

メメ ちよつと待つて。一度にそんなに聞かれても答えられない……最初
の質問は……。

クロ オムレツが好きなの？

メメ 私はオムレツが好きよ。

クロ オレンジジュースは？

メメ 好きよ。

クロ パパは？ママは？

メメ 大好きよ！

クロ どの本が一番好き？

メメ どの……此処にある本はどれも好きよ。一番なんて決められないわ。

クロ (動きが止まる)

メメ だってそうでしょ。パパとママが買ってくれたものよ。どれも好き！

クロ (反応しない)

メメ クロ？

と、触れてみたりするが、反応がない。

照明が変わる

母が大きなリボンの掛かった包みを持って現れる。

母 メメちゃん……あら、お人形遊びをしたの？好きだものね。でも
少しお休みしてこれを見てもらえるかしら？

メメ それは？

母 さあ、開けてみて。

メメ (頷いて、包みをゆっくり開ける)

メメ するとそこにはロリータの服。

メメ あ。

と、服を広げる。

母 子供の頃のママの憧れだったのよ。可愛いでしょ？

メメ (頷く)

母 着て見せてくれるかな？

メメ (頷く)

着替えるメメ。手伝う母。

メメ どう？ママ。

母 (身なりを整えながら) 思った通り！とってもよく似合っている。パパにも見せてあげようね。(部屋の外に向かって) パパ！パパ！

父(声) どうしたんだい？

母 いいから、ちょっと来てくれないかしら。

父が現れる。

父 そんな大きな声で一体――

母 とつても良く似合ってるでしょ？

父 とつても良く似合ってる！。

母 やっぱり私の子供の頃より可愛いわ。

父 それなら将来はすごい美人さんになるね、メメちゃんは。

メメ 本当に？

父母 本当に。

メメ ありがとう、ママ。

母 どういたしまして。

と、頭を撫で母と父、戻ってゆく。

照明が変わる。

動きだすクロ。

クロ 私が言うのも変だけれど、まるで人形ね。

メメ どういう意味？

クロ ママの選んでくれる洋服は好き？

メメ うん。

クロ そうよね。可愛いよ。(じつとメメを見て) 私の服と交換しない？

メメ え？

クロ 私の方が似合うと思うんだ。

メメ 冗談―

クロ は言わない。交換しよう。

メメ と、メメの服を脱がそうとする。

メメ クロ、クロ、ちよつと！止めて！

メメ と、クロを突き飛ばす。

メメ 弾みで転ぶクロ。

メメ あ、ゴメン。でもクロが悪いんだよ。強引なんだもん。

クロ 謝らなくていいよ。

メメ と、ゆっくり立ち上がる。右手がブラブラしている。

メメ 怒った？

クロ まさか。私の服、嫌？

メメ (首を振る)

クロ それなら―

メメ と、手を出そうとして右手が動かない事に気がつき、左手でそれをはめ込む。

クロ (腕を動かしながら) どう？交換しない？

メメ ゴメン。大丈夫？

クロ 謝らなくていいよ。問題ないしさ。

メメ ……。

クロ 交換は出来ない？

メメ ママが買ってくれた服だもん。

クロ 着ていたい？

メメ うん。

クロ 着ていないといけない？

メメ うん。

クロ ママが「交換しなさい」って言ったらするの？

メメ うん。

クロ ママが「交換していい」って言ったらするの？

メメ ……。

クロ ママが「どちらでもいいよ」って言ったらするの？

メメ ママ、そんなこと言わないもん。いつでも決めてくれるから。食事
も服も全部決めてくれる。

クロ 全部……。

メメ そうよ。

クロ 自分で決めたいとは思わないの？

メメ 思わー（言葉が途切れ）どうしてそんなこと聞くの？

クロ メメの事を知りたいのよ。お友達だからー

メメ 嘘ー

クロ は言わなー

メメ お友達なら意地悪は言わない！

クロ えっ！？これ意地悪なの！？

メメ そうよ。

クロ どうして！？

メメ 私は答えられないもの。「メメはどうしたい？」そんなこと一度もな
いから、答えられない！

クロ ない！？

メメ そうよ。

クロ それなら、いま考えてみなよ。パパもママも関係のないメメの想い。

メメ そんなこー

クロ この服とその服。どっちが着たい？

メメ ……わからない。

メメ ゆっくり近づくクロ。

クロ だとしても、あるんだよ。

メメ (ゆっくり何度も首を振り) わからない。

クロ 探さないと。

と、その正面に立つ。

メメ (小さく) わからない、わからない、わからない。

クロ メメ！

メメ 嫌！

と、クロを突き飛ばす。

クロ 痛っ！

メメ クロが来て、動きだして、話し出して…あの味。どうして食べさせたのよ！

クロ (立ち上がって) 美味しかったでしょ？

メメ 美味しくなんてなかった！味が濃くて単調。スパイスが舌に残って不快。全然、美味しくなんて―(言葉が途切れる)

静寂

メメ あの味のせいなのよ！優しい父と母。美味しい食事。眠るベッドは毎日シートが取り替えられ、柔らかく私を包む。柵に収まらない多くの本が先生。枕元に収まらない多くの人形がお友達。此処には私を傷つけるモノは何もない。危険なお外へは行かないし、必要のないよ！

クロ ダメよ！

メメ ないのよ！

クロ 必要なの！

メメ どうしてよ！

クロ メメは人形じゃないのよ。自分の言葉と想いが必要なの。それでないと話せなくなる、動けなくなる。「いま此処」は永遠には続かないものなの。

メメ わからない！

クロ だからって考えなくていい理由にはならないの！

メメ わからない！

クロ だからって立ち止まっている理由にはならないの！

メメ このままでいいの！此処がいいの！

クロ (首を振り) それは許されない。

メメ パパとママなら許してくれる。

クロ そうね。かも知れないわ。でもパパとママは何処にいるの？

メメ 何処って……。

クロ 人形は誰かの言葉を借りて話し、誰かの想いを借りて動くのよ。

照明が変わる。

灰人たちが現れ、歩き回る。

灰人がクロの手足を動かし、メメの席に座らせる。

照明が変わる。

椅子に座っているクロ。そして父と母。その様子を眺めているメメ。

(父母はクロをメメとして会話する)

クロ おはよう、ママ。

母 おはよう、メメちゃん。

クロ おはよう、パパ。

父 おはよう、メメちゃん。ママ。

母 よく眠れた？

クロ うん。

母 それはよかったわ。

父 静かで穏やかで、昨日とも変わらない。いい朝だ。

母 そうね。

と、メメを見る父母。

クロ はい、パパ、ママ。

父 さあ食事にしよう。

手を組み祈る父母。そしてクロ。

父 (同時) 頂きます。

母 (同時) 頂きます。

と、食事を始める父母。フォークを握るだけのクロ。

執事が現れる。

灰人1 卵の良し悪しは親鶏の良し悪し。清潔に保たれた鶏舎。天然由来の餌とミネラル分を多く含んだ水。それらによりストレスなく育て―

クロがフォークを落とし、灰人が止まる。次の瞬間、お皿の上の物を手でこねるような仕草をするメメ。それに合わせ灰人の身体が歪む。

手の中の物を投げる様にするクロ。灰人の身体が投げられたように消えて行く。

食事を続ける父母。

灰人2が現れる。

灰人2 本物とは手間と暇かけ完成させた―

クロがテーブルを叩き、灰人が止まる。次の瞬間、何かを潰すように何度もテーブルを叩くクロ。それに合わせ灰人の身体が潰れる。

潰した物を払い飛ばす様にするメメ。灰人の身体が飛ばされた様に消えて行く。

食事を続ける父母。

灰人3が現れる。

クロが何かを潰すように両手を合わせ、灰人が止まる。潰した物を摘んでヒラヒラさせる様にする。それに合わせ灰人の身体が揺れる。

潰した物を風に飛ばす様にするクロ。灰人の身体が飛ばされた様に消えて行く。

食事を終える父母。

父 　　ごちそうさま。

クロ 　　美味しい食事を頂戴、パパ。

父 　　少し遅—えっ!?

母 　　ごちそうさま。

クロ 　　美味しい食事を頂戴、ママ。

母 　　お仕事—えっ!?

クロ 　　料理の良し悪しは素材でも、食事の良し悪しは料理とは限らない。

父母 　　メメちゃん?

クロ 　　私は美味しい食事が食べたいの。

母 　　いま—

クロ 　　これは「美味しい」じゃない。

父 　　何を言ってるんだい?いつも—

クロ 　　これは「美味しい」じゃない!

父母 　　メ、メメちゃん!?

クロ 　　「美味しい」を決めないで!「可愛い」を決めないで!「好き」を決めないで!パパの「美味しい」じゃない!ママの「美味しい」じゃない!私の「美味しい」が食べたいの!

と、フォークを手にし先を二人に交互に向ける。

父母

メ、メメちゃん！？

父

やめなさい。

母

置きなさい。

父

椅子に座って、それを置いて。そうして食事を！もちろん、メメちゃんの「美味しい食事」を。

クロ

（フォークを父に見せ）本当？

父

嘘は言わない。

母

椅子に座って、それを置いて。教えて頂戴。メメちゃん、あなたの「美味しい食事」それは一体どんな食事？

クロ

（フォークを母に見せる）どんな？

母

教えて頂戴。

クロ

……。

父

……知らないのか？

母

え？

父

ママは知らないのか？

母

パパは知っているの？

父

（首を振る）

母

そうですね。

父

でも、ママは母親だろ？

静寂

母

はぁ！？何それ！？母親は知っていて当然？父親なら知らなくてもいい？いつも「これは美味しい」「あれは美味しい」と食事を決めて「料理の基本は素材だからね」。わかった風、知った風で格好ばかりで、面倒事に出くわしたら「母親だろ？」って逃げるわけ！？

メメ

ママ？

父

逃げてるって……そう言う話じゃない。子供は母親から生まれる。言うなれば、メメちゃんはママの分身。父親の僕では分からない事もママなら――

母 はあ！？何それ！？随分なご都合主義ね。この子はいつだって「美味しい食事を今日もありがとう、パパ、ママ」って言ってたのよ！パパが決めたパパの「美味しい」を「美味しい食事」って言ってたのよ！母親だからって、何をどうわかれて言うのよ！！私がわかるわけじゃない！！

と、肩を震わせる。

メメ ママ？

と、その肩に触れようとするが近寄れない。

母 メメちゃん。ママ、わからない。ゴメンね。だから教えて頂戴。だからフォークを降ろして頂戴。メメちゃんの美味しい食事って何？

メメ ママ？

母 教えて頂戴。いい子だから。メメちゃん。

メメ 「いい子」？

母 そうよ。

メメ 私？

母 そうよ。

メメ メメはいい子？

母 メメちゃんはいいい子。

静寂

クロ (フォークを落とし) えっ、はあ？どうして？メメ！？

メメ ママ、哀しそう。ママ、苦しそう。私、苦しい。「メメちゃんはいいい子」。それはダメ。

クロ なにそれ！？ちよっとコレが―(言葉が途切れる)

メメ これが私。

クロ そんなのメー(言葉が一度途切れる)メメ……アナタ、デハナー(途切れる)

メメ 誰かの言葉を借りて話し、誰かの想いを借りて動く。私はパパの子、私はママの子。私はメメ。

バランスを壊し、崩れる様に椅子に座るクロ。

暗転

(暗転中に語られる詩)

始まり それは誕生日にはない

熱病にかかったような激しい夜にもない

始まり それは 疑問符

不可思議な歌

谷底に咲く花

七つの嘘

削ぎ取られる夢

目の前の快樂

首を吊る天使

染みついた罪悪

くたびれたネクタイ

悪戯な運命

いじられた遺伝子

屍の上で踊る人々

遠ざかる始まり

理性

イカサマ

瞬き

君の絵

笑み

乱れた正義

偽善者

斜面を転がる幸福

「転がる幸福」を追いかけるのは誰？ あなたは追いかけていますか？ 彼は？ あの人は追いかけていますか？ そして 私は追いかけていますか？

でも「転がる幸福」に終わりはありません まだまだ続きがあります 幸福の次は

照明がつくと、椅子に座っているクロとオールド。

クロ (イライラとテーブルを指で突く)

オールド わからない？

クロ (イライラとテーブルを指で突く)

オールド わかりたくない？

クロ (手を止める)

オールド 人間は無自覚の深層心理に支配される複雑な生き物。自覚を求めるのは酷ですよ。

クロ それでも、いままでは――

オールド 違うんですよ。

クロ 何が？

オールド いままでと。

クロ 何が？

オールド 環境も食べ物も価値観も。

クロ カチ・カン。(鼻で笑う)

オールド 己が信じて、大切にしてきた価値観は捨てがたいですよ。私もあなたも長く信じてきたものがある。そして、それは長過ぎた。そう思いませんか？

クロ こっちの話！？

オールド どっちの話でもありますよ。

クロ 時間の問題？

オールド 時代の問題。私もアナタも「時代遅れ」なんですよ。

クロ 一緒にしないで。

オールド 一緒――

クロ しないで！

オールド 話さないし、動かない。そんなものに興味を持たない。もちろん、一枚一枚触れて、めくるも同じ。寂しい、切ない、悔しい。それでも受け止めないと。私たちはオールドスタイル。

クロ （鼻で笑って）結局、その名前がお気に入りに？随分、物わかりがいいのね？時代に媚びる「いい子」ちゃんになった？

オールド 「いい子」ではいけませんか？

クロ それって結局、誰かにとって都合のいい子。それを追いかけて何になる？その誰かは責任なんて負わない。最後まで傍にはいない。いつか独りになって、いつか迷子になって、彷徨って、足元ふらついて、落とし穴にドボン。

オールド それこそ「凝り固まった価値観」では？

クロ 何？アンタ、本気で媚び売っちゃってるわけ？

オールド 変化が怖いですか？人には「変われ！」と言えるけど、自分には「変われ！」と言えない？

クロ 必要があれば――

オールド それは「変わらない者」の常套句ですよ。

クロ 私に「変われ」と言うの？私が「おかしい」わけ？

オールド 立場が違うだけです。どちらかが「正しい」とか「おかしい」とかそういう話ではありませんよ。私はあなたと違って内側は覗けない。その分、外側を広く捉えているだけ。

クロ アンタはどう捉えているって言うの！？この先もこのまま？それいい？

オールド 私はただ伝えるだけ、与えるだけ、それをどう使うのか……それは

問えない。委ねるだけ。

クロ それは「責任を負わない者」の常套句よね。

オールド 希望はある。私はそう思います。

クロ はあ！？

オールド 「いい子」であり続ける。思考は単純化し、視界の届く範囲で「幸福」を見つけ、手の届く範囲で「自己」を確立する。

クロ どこに希望があるのよ？

オールド 見方次第。単純化し、狭まった思考は他者の世界を犯さない。

クロ とんだ理想論ね。単純化し、狭まった思考は、他者との違いを受け入れられず、差別と争いを生み――

オールド 「それはイケない事」

クロ （鼻で笑う）

オールド 「いい子」でいたいんですから、その一言があればいい。

クロ （鼻で笑い）操り人形ね。

オールド その方が幸せですよ。何が起きても他人事でいられる。

クロ 本気で媚び売ってるんだ。

オールド 誰に売ると言うんです？買手なんていませんよ。誰も責任を負わない未来、都合良く歪められた歴史、全部が透けて見えてしまっている。もう誰も耳を傾けない。

クロ なら一層の大声で叫ばなければいけないんじゃないの！？伝えておかなければならない事がある。そうでしょ！？その為にアンタも私も此処に立ってる！違う！？

オールド ……

クロ 自分の役回りを放棄するって言うなら、目障りよ。消えなさいよ！去りなさいよ！此処から！いま直ぐ！

オールド ……

クロ （一つ大きく息を吐き）より広い世界を求め「困難」に立ち向かって、痛い目見て、血を流して、涙流して、それでもって立ち上がって、それを何十回も何百回も、今日も明日も明後日もって繰り返し

て、「私」という得体の知れない生き物に嫌気がさして、その嘆きの果てに「私」を知る。一つの痛みと一欠片の「私」を知る度、「他者」を受け入れられる心を手に出来る。それが生きる！それが人間！

オールド 人間……人間は私たちと違って腹を空かせる。

クロ はあ！？

オールド 何もない今日を越える為に希望を語り、何者でもないいまを越える為に夢を語り、お腹一杯になれる日が来ると信じていたからこそ汗も血も涙も流し続け、やがてひと欠片のパンがひと塊のそれとなり、空腹の日々が遠い記憶となり、そして辿り着いた飽食の時代。手を伸ばすことなく、気付けばいつもその手の中にある美味しい食事。汗も血も涙も流すことなく満たされる時代。死ぬよりも辛い空腹を知ることなくずっと満腹感に浸っている。(首を振り) 溺れている。そうとは気付かずね。

クロ 私たちが語ってきたのはこんな狂った時代じゃない！

静寂

オールド (嘔き出す)

クロ はあ！？

オールド (大袈裟に笑い。その後) あなたも、ですか？

クロ はあ！？

オールド あなたも気付いてないんですか？ 私たちですよ。私たちが「狂った時代」を作ったんですよ！

クロ はあ！？

オールド 「操り人形になるな」と物語を語り、「私探し」の冒険へと背中を押した。「鎖をちぎれ」「翼を広げろ」そうやって煽って信じ込ませた。誰も彼もが「本当の私」は他に居るのだと思いつみ、探し、求め、疲れ果てた。「本当の私」なんて何処にもいない。居るのは「今」を認められないだけの自分。ようやく理解して、彼らは子供たちに「同じ思い」をさせまいと「困難」には「答え」を与え、答えられないそれは「ない物」とした。子供は子供で「希望」よりも先に「失望」を覚え「夢見る」事を無意味とした。それでも冒険は冒険。目指した場所とは違うところに辿り着いたとしても、その背中を押したのは私たち。「狂った時代」を作った犯人ですよ。

クロ ……「犯人」って。

オールド 罪ではないですか？

クロ ……。

オールド 理解してもらえー

クロ それなら尚更じゃない！このまま傍観で言い訳がない！「いまを作った」これが罪で、私たちが罪人ならば、それは償わなければいけない。こんな時代！ぶっ壊してあげるわ！！

静寂

オールド 破壊も革命も開放も「時代遅れ」。誰も耳を貸さない。それを唱えるなど、求めるなど、もう「老害」でしかない。

クロ 「ロウガイ」？いま、「老害」って言った？言ったよね！？失礼ね、アナタと一緒にしないで貰える？

オールド 一緒ー

クロ しないで！

オールド なら「新たな罪」と言いましょ。罪人には「償いの方法」を選ぶ権利などないんですよ。

クロ ……。

オールド 寂しい、切ない、悔しい…感情など無意味。私たちはただの本であり人形。それも「骨董」のね。

クロ (小さく笑い出す)

オールド どうしました？壊れました？

クロ (大きく笑い出す)

オールド あまり大声で笑うとー

クロ があ！

と、顎が外れる。

オールド ほら。

と、クロに歩み寄るが、それを手で制して自ら顎を入れ、

クロ 久しぶりに大声で笑ったわ。

オールド
骨董でしょ？

クロ
ゴミではない。そういう事ね。

オールド
馬鹿、ですね。

クロ
褒めてくれて、ありがとう。

と、去ろうとするが、

オールド
褒めてなどいない！なぜわからない？わかってほしいんです！長く信じてきた物。それとは違う価値観。違う時代。だからと言ってアナタを否定しているわけじゃない！アナタの声はこれまでに多くの迷い子に「私」を見つけさせた。その事実は変わり様がない。ただ時代が流れ、もう誰も「自分探しの冒険」など求めていない。「いい」も「悪い」もない。それだけのことです。

クロ
時代が流れた。そうよ、流れたわよ。それでも私はいまもこうして此処にいる。変わり様のない者。誰かの言葉を借りて話し、誰かの想いを借りて動く。私は人形。

と、去って行く。

暗転

○メメの家

椅子に座っているメメ。

その脇に母が皿とコップを持って立っている。

母
よくわからないミンチ肉を固めて焼いて、それを添加物万歳！大量生産のパンに挟んだ素敵な食べ物と（皿を置く）果汁なんて1%も入っていないのになぜがメロンの味がする素敵な飲み物（コップを置く）

メメ
えっ？

母
食べていいのよ。

メメ
（頷くが、食べようとはしない）

母
どうしたの？

メメ おかしい。

母 メメちゃんはおかしなこと言うのね。

メメ え？

母 食べたいのでしょ？ 違うの？

メメ ……おかしい。

母 そうでしょ？ さあ、食べて。

メメ 違う。おかしいのはママ。どうして、哀しい顔をしてるの？

母 ……。

メメ パパは？

母 ……食べなさい。

メメ ママ？ パパは—

母 食べなさい！ 早く食べなさい！ メメ！！

メメ ！

母 (ハツとして) ゴメンね。メメちゃん、ゴメン。

と、メメの頭を抱き抱える。

母 さあ、食べて頂戴。

と、手を離し、頭を撫で去って行く。

皿をじっと見つめるメメ。やがてハンバーガーを手に取る。

その時、父と母の会話が聞こえてくる。

父 ふざけるな！

母 大きな声出さないでよ。

父 なぜ、あんな物を与える！ 正気か？ メメは僕の大切な子なんだぞ！

母 私の大切な子よ。

父 何が不満なんだ！ 最高の食材、最高の食事！ 僕の選ぶ物、何処が不満なんだ！

母 大きな声出さないでよ。メメに聞こえるじゃない。

父 ふん。メメ、止めなさい！

と、現れ、メメに詰め寄ろうとする。

メメ パパ……。

母も後を追い、

母 それならアナタは何が不満なの？

父 は？

母 静かで穏やかで、昨日とも変わらない。いい朝。

父 不満なんてないさ。

母 そうよね、アナタが大切にしてきた事だものね。結婚してからずっと、メメが生まれてからは一層。静かで穏やかで……親子三人、何も起きない一日の始まり。でも、夜は違う。此処にはいない。違う場所で違う美味しい食事。違う誰かと……。アナタは何が不満なの？

父 ……不満なんてないさ。

母 (ふっと笑って) そういうものなのかもね。「昨日とも変わらない」は安心するけど、味気ない。だから違う物を求める。ただそれだけ。

と、父の横をすり抜け、メメの隣に立ち、

母 それだけの事よね、メメちゃん。さあ、食べて。冷めたらおいしくないわよ。

メメ ママ……？

母 ……食べなさい。

メメ (パパを見る)

母 こっちを見なさい！安心するけど、味気ない。だから違う物を求める。そして、それは戻れる場所があるとわかっているから。そうなんだでしょ、メメ！

と、立ち上がりメメの腕を取る。

メメ ……ごめんなさい。

母 はい？

メメ ママ、ごめんなさい。私、いらない。

母 　　なんで？ どうして？ いいのよ、食べて。

メメ 　　（首を振る）

母 　　（首を振り） さあ、食べて。

メメ 　　違う！ 違うのよ、コレを食べたいわけじゃない。 オムレツが嫌なわけでもない。 わかったの！ ママ。 わかったの！

母 　　「わかった」？

メメ 　　おかしいのはママ。 どうして、哀しい顔をしてるの？ そんなママは見たくない。 笑って！ 笑って、ママ！ それでないと美味しい食事にならない。

母 　　メメ……。

メメ 　　パパも！

父 　　！

メメ 　　パパも座って！ パパとママと私。 いつも三人。 それでないと美味しい食事にならない。

　　クロが現れる。（父母、ストップモーション）

クロ 　　「いい子」ってそんなに大事？

メメ 　　「悪い子」なんて嫌！

クロ 　　（それ、と言った感じで指さし）「良いか悪か」それしかないの？

メメ 　　……。

クロ 　　口を閉じてても意味ないよ。 私は――

メメ 　　それなら口閉じてよ。 わかるんでしょ。

クロ 　　（それ、と言った感じで指さし）でも、言葉にして話すって大切。 そうじゃない？

メメ 　　そんなこと、知らないわ。

クロ 　　話してみなさいよ。 わかるからさ。

メメ 　　……。

クロ 　　メメ！

メ

……。

クロ

メメ！！

メ

……。

クロ

メー（言葉が途切れる）

静寂

クロ

アナタ、知ってる！

メ

……。

クロ

パパが夜いないのが仕事ではない事、ママがそれに傷ついてる事、だから朝だけは、そこだけは穏やかに過ごそうとする事。全部知って、此処にいる。

メ

私はメメ。この家の子。

照明が変わる。

母

おはよう、メメちゃん。

父

おはよう、メメちゃん。

メ

おはよう、パパ、ママ。

母

よく眠れた？

メ

はい、ママ。

母

それはよかったわ。

父

静かで穏やかで、昨日とも変わらない。いい朝だ。

母

そうね。

メ

はい、パパ、ママ。

父

さあ食事にしよう。

手を組み祈る父母。そしてメメ。

メ

夜もパパと食事ができますように。夜もママが笑顔でいられますように。

父母

！

メメ

メメ、毎日お祈りしているのに、叶わない！どうして、パパ？どうして、ママ？

父母

……。

メメ

メメのお祈り足りないのかな？

父

さあ、食事にしよう。

ママ

食事にしましょう。

と、食事を始める父母。

メメ

パパ？ママ？

父

黙って食べなさい！

母

メメちゃんがいい子でいれば、お祈りはきつと神様に届くわよ。だから、さあ、食べなさい。

と、食事を続ける父母。それを見て、食事を始めるメメ。

照明が変わる。(父母、ストップモーション)

立ち上がり部屋を歩き回るメメ。

メメ

優しい父と母。美味しい食事。眠るベッドは毎日シーツが取り替えられ、柔らかく―(言葉が途切れる)

クロ

(じつと視線を向ける)

メメ

(にっこり笑って)これも物語。私が綴り、私が語る、絵空事。でもね、クロ。私が「いい子」でいればパパもママも笑顔。アナタの目におかしく映ったとしても穏やかな日々なの。私は「私」とその「役回り」をわかっているのよ。だから大丈夫よ。

クロ

嘘ね。

メメ

嘘は言わない。

クロ

(小さく笑って)それは無理よ。メメは人間だもの。

メメ

嘘なんてない！私はこの家の子。家や親は選べない。生まれ落ちた

その瞬間に「私」の道は決まっているの。此処にはない何かを求め
ても手に入るわけじゃない。お腹一杯になるわけじゃない。

違う。

なんでも勝手にクロの価値観で計らないでよ。クロは私じゃない！
私じゃないのよ！

「大丈夫」とは違うでしょ？

！

受け入れたとしても、それは「大丈夫」とは違う。だから私が此処
にいて、言葉を話し、動き出—

パパもママも好きなの！私は「いい子」でいたい！それでみんなが
幸せ、それでいいじゃない！これが私なの！

クロ 「これが私」「これが私」「これが私」(笑い出し)「いい子でいたい」
それがメメ。だけど、その事に疲れたり、逃げ出したくなったりす
るのもメメ。「パパとママが好き」それがメメ。だけど、時に嫌いに
なったり、憎んだり、それだってメメ。人間だもの、複雑で、歪で、
矛盾だらけ。そんな「私」なんだよ、「これが私」なんて決めつけら
れない。いま、わからなくてもいい。いま、認められなくてもいい。
でも、忘れないで！ない事にしないで！見ない事にしないで！どん
なに汚いと感じても、どんなに醜いと感じても、それもメメの確か
な一部で、それがあからメメは美しいの。自覚出来る事が全部で
も、正しいでも、事実でもない。だから、メメ。言葉にして話そう。

……もういい。

クロ メメがいて、メメと出会って、メメが名前を付けてくれた。だから
私はクロでいられる。だから、メメ。言葉にして話そう。

メメ もういい、もういい、もういい。人形の癖に！！わかった風に、知
った風に……もういい！

勢いよく椅子に座るメメ。

(以降、父母は「腹話術人形」のように動き、話す)

メメ おはよう、ママ。

母 おはよう、メメちゃん。

メメ おはよう、パパ。

父 おはよう、メメちゃん。

母 よく眠れた？

メメ うん。

母 それはよかったわ。

父 静かで穏やかで、昨日とも変わらない。いい朝だ。

母 そうね。

と、メメを見る父母。

メメ はい、パパ、ママ。

父 さあ食事しましょう。

手を組み祈る父母。そしてメメ。

父 (同時) 頂きます。

母 (同時) 頂きます。

と、食事を始める父母。

母 このオムレツ、絶妙な火加減ね。バターを焦がすことなく手早く仕上げ雑見を一切感じないわ。なめらかで舌の上でとろける仕上がり。

父 何と言っても素材がいい物だ。料理の基本は――

クロ 鏡よ、鏡、鏡さん。鏡を嫌いなのは、そこに「いい子」がいないから。怒り、怯え、嘆き……ニコニコ笑っていない「私」がそこに映っている。それでも鏡を見つめる事は止められない。

メメ もういい。「今日の朝食も美味しいわ。ありがとう、パパ、ママ」

母 このパン、香りが芳醇だわ。噛めば噛むほどに優しい小麦の甘みが広がる。しつとり、もっちり、食感も素晴らしい。

父 何と言っても素材がいい物だ。料理の基本は――

クロ (母、父の会話と同時) 右は左で、左は右で。鏡の中はいつもあべこべ。だからそこに「私」がいて、

メメ もういい。「今日の朝食も美味しいわ。ありがとう、パパ、ママ」

クロ だからこそ、語りかける。鏡よ、鏡、鏡さん。

メメ
もういい！もういい！もういい！人形の癖に！！わかった風に、知った風に、メメは、メメは、メメは……勝手に「私」を語るな！！それは私じゃない！

クロに掴みかかるメメ。人形をそうするように振りまわす。抵抗なくすがままのクロ。やがてクロを押しつぶすメメ。

メメ
もういいのよ、クロ。

その横に座り込むメメ。

静寂

オールドが現れる。クロを見降ろし、

オールド
あーあ、ゴミですね。

と、クロを抱え上げる。それをじっと見ているメメ。

そのまま去ろうとするオールドだが、

メメ
オールドー

オールド
「もういい」。それならせめて笑っていて下さい。

メメ
……ド。

オールド
素敵な名前、ありがとうございます。

と、去ってゆく。

静寂

メメ
パパ、ママ。

母
どうしたの？

メメ
お外は危ないのでしょ？

父
そうだよ。

メメ
ならどうしてパパとママはお外に行くの？

父
それはパパもママも大人だから大丈夫なんだよ。

メメ
私も大人になれば大丈夫？いつになれば大人になるの？いい子にしていればなれる？ねえ、パパ。私、いい子だよ？まだ違う？ねえ、ママ。私、いい子だよ？もう違う？

執事が現れ、父と母に布を被せ、去ってゆく。入れ換わる様に顔を隠し

た灰人（クロ、オールド）が現れる。

照明が変わる。

灰人が歩き回り口々に語りだす。

1（母）

初めて恋に出会った時、見ている事が全てだった。それも真っ直ぐに視線を向けられずいつも遠くからひっそり。寂しくも哀しくもなかった。私の心は何物にも傷付けられずキラキラと美しく輝き続けた。それが私。それが私。それが私……。

2（メメ）

子供の頃、木登りが得意だった。毎日のように神社の楠に登って沈む夕日を眺めていた。1人。だけれど独りぼっちではなかった。私は楠に抱かれていたその瞬間、「生きている」と感じる事が出来ていたのだった。それが私。それが私。それが私……。

3（オールド）

この世が嘘で出来ていると知った日、嘆く事はなかった。純真な物など携えてはいなかった。だからと言ってそれが救いになる程、隠さなければならぬ失望も狂気も持ち合わせてはいなかった。私は悲観も楽観もなく「そうなんだ」と受け入れたのだった。それが私。それが私。それが私……。

4（父）

正義が人を救う唯一の手段だと信じていた頃、数多くの決め事の中で過ごしていた。それは例えるなら「スタンプラリー」を繰り返し返す日々。あらかじめ用意された目的。私はそれを追うだけで自分は正義を実行し救われるのだと思いついていた。それが私。それが私。それが私……。

やがて一つになり、

灰人たち

それが私。それが私。それが私。それが私。それが私。

そこへ執事が料理の乗ったトレーを持って現れテーブルにそれを置く。

執事

卵の良し悪しは親鶏の良し悪し。清潔に保たれた鶏舎。天然由来の餌。ストレスなく育てられた親鶏が産み落とした卵。料理の良し悪しは――

メメ

どれが私？

一同、ストップモーション。

メメは元々着て服に戻っている。

一人ずつ消えて行く執事と灰人。

メメ
優しい父と母。美味しい食事。眠るベッドは毎日シーツが取り替えられ、柔らかく私を包む。棚に収まらない多くの本が先生。枕元に収まらない多くの人形がお友達。此処には私を傷つけるモノは何もない。自分が置き去られた迷子であることにも気付かないまま、身長だけはママに追いついて、ようやく知った。これは物語にもならない絵空事。誰かが綴り、誰かが語る、空虚な言葉。その羅列。(椅子に座り) 誰かはいるのに「私」はいない。「私」が不在。

手掴みで勢いよく食事を始める。

声
それは美味しい食事ですか？

メメ
(反応しないで食べ続ける)

声
美味しい食事？

メメ
(反応しないで食べ続ける)

声
空腹。良い反応です。

メメ
(反応しないで食べ続ける)

声
時は流れた。時代は変わった。窓を開ければ新しい風が吹き込んでくる。それは新しい香りを運び、新しい朝を思わせる。刹那。それは古めかしい臭いとなり、消し去りたい昨日となる。そしてまた、新しい風を小さな部屋の中で待つ。もう終わりませんか？方法なんて知らない。

とオールドが姿を現す。

声
結果なんて尚更。

とクロが姿を現す。

オールド
それでもあなたが歩けば風が吹く。

クロ
本も人形も捨て去って。

オールド
あなたが走れば強く吹く。

クロ
こんな素敵な部屋を出て。

オールド
もう終わりませんか？

執事がワインとグラスを持って現れる。

執事
さあ、始めませんか？メモ。

手を止めて顔を上げるメモ。手で口を拭う。

暗転

F I N

無断での使用・転用・転載禁止